



漢詩を味わう

第85回

こじようにいんすはじめはれのちあめふる

飲湖上初晴後雨 蘇軾

水光激灩晴方好

水光激灩として晴れて方に好し

山色空濠雨亦奇

山色空濠として雨も亦た奇なり

欲把西湖比西子

西湖を把つて西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹総相宜

淡粧濃抹総べて相宜し

さざ波を浮かべた水の光は、今朝のように晴れわたつていてこそ素晴らしい。

一方で、ぼんやりと山の色が靄にけむつた雨の景色も、またひときわの眺めだ。

晴れても雨でも、美しい西湖の姿をいにしえの越の美女西施にたとえてみるならば、薄化粧も、丹念な化粧、すべてみな風情がある。

《激灩》 広々とさざ波をたたえるさま。

《空濠》 霧雨に視界がけむつてぼやけるさま。

《奇》 際立つてすぐれていること。

《西子》 西施のことで、中国では西子とも呼ばれる。呉王夫差に寵愛され呉を滅ぼす

一因ともなった。

蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士・一〇三六〜一一〇一）は学問・芸術の諸分野に秀でた宋時代の士大夫（文人官僚）でした。二十一歳で進士に及第して官途に就きますが、新法党の王安石と対立しながら各州の知事職を歴任しました。四十四歳の時には新法を批判する詩を作り投獄されあやうく死刑にされる危機にも遭遇しました。

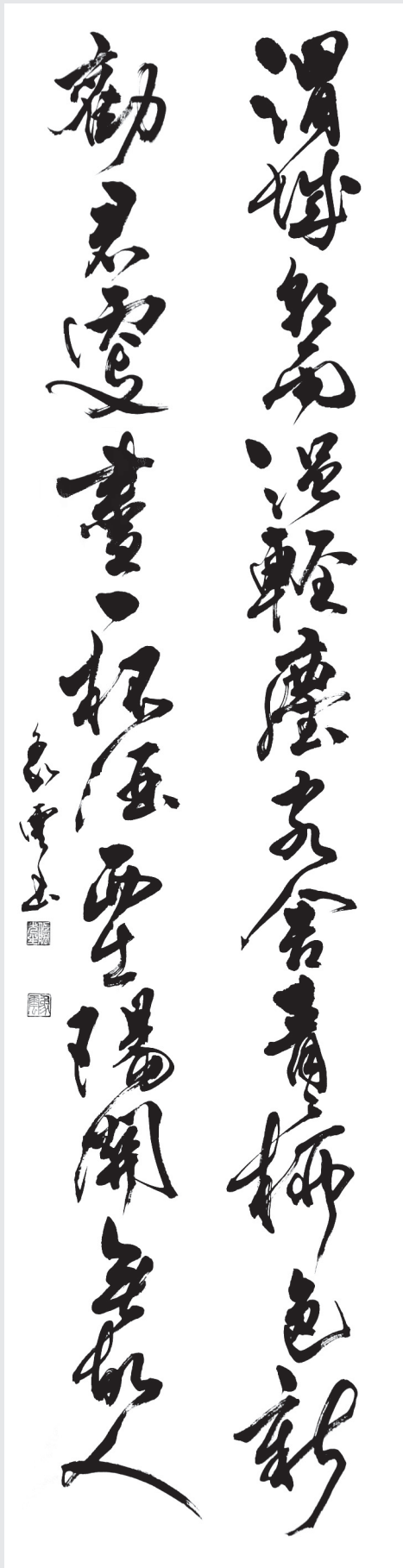
この詩は三十七歳から三年間、杭州通判（副知事）として西湖のほとりて暮らした当時に作られた二首連作の第二首です。西湖に舟を浮かべ酒に酔つてよい気分になって詠んだ即興詩です。古くから西湖の優美さを巧みに表現した詩として有名です。

前半の二句は対句で、「激灩」と「空濠」は少し難解な表現ですが、水と山、晴れと雨の景色を対照的に描写しています。そして詩の後半は、呉王夫差に寵愛された春秋時代の越の美女西施を登場させ、西湖の美しさを表現しています。晴れた日の西湖をあでやかに化粧した西施にたとえ、雨の日の西湖を薄化粧の西施にたとえるという、人の意表を突く異質の美を対比させた着想です。

当時の人々は伝説で西施が絶世の美女であったことを知るだけで、蘇軾にしる西施の美しさは想像の世界です。その西施と西湖の美しさを喩えること自体が奇抜な発想です。晴れて良く、雨の日もまた美しい西湖の千変万化さまざまな顔をもつ美しさを見事に表現しています。景を特定の美女にたとえるというのはこの詩が初めてといわれます。ちなみに蘇軾は眉山県の生まれで、西施は西湖のある浙江省の出身です。本邦の松尾芭蕉は『奥の細道』で「象潟や雨に西施のねぶの花」と秋田県の象潟を歌っています。「雨に濡れる象潟のネムノキの花を見て」と、世に言う西施の美しさとはきつとこのようなものだったのだろ」というような意味合いですが、蘇軾のこの詩の影響がうかがえます。

参考文献：新漢詩紀行（NHK出版）・蘇東坡詩選（岩波文庫）・漢詩の事典（大修館書店）

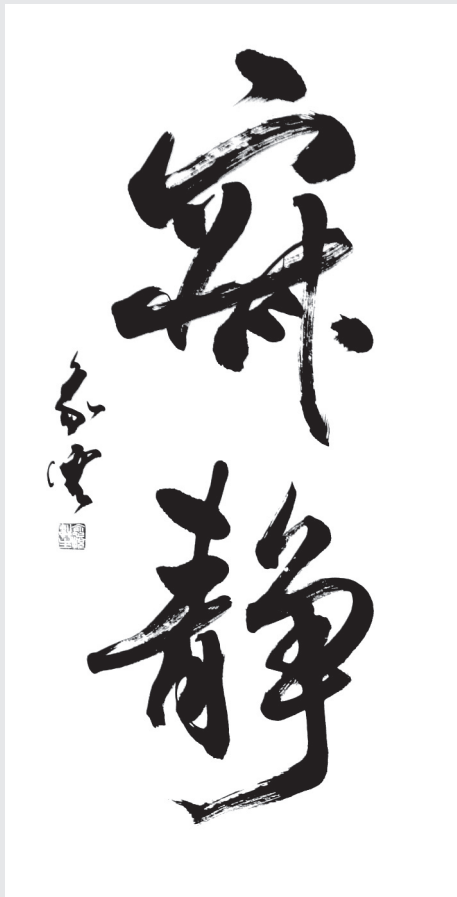
渭城の朝雨 軽塵を浥し 客舎青青として柳色新たなり 君に勧む 更に盡くせ一杯の酒 西のかた陽關を出づれば故人無からん



《大意》渭城の朝の雨が軽い砂埃を潤している。旅館の前の柳の葉色も雨に洗われて瑞々しい。まあ君、ここでもう一杯飲んでくれ。西域地方との境である陽關を出れば、もう友人は一人もいないだろうから。(王维詩・元二の安西に使用するを送る)

寂 静

静 自 適



《大意》ものしずかなこと。(劉兼)

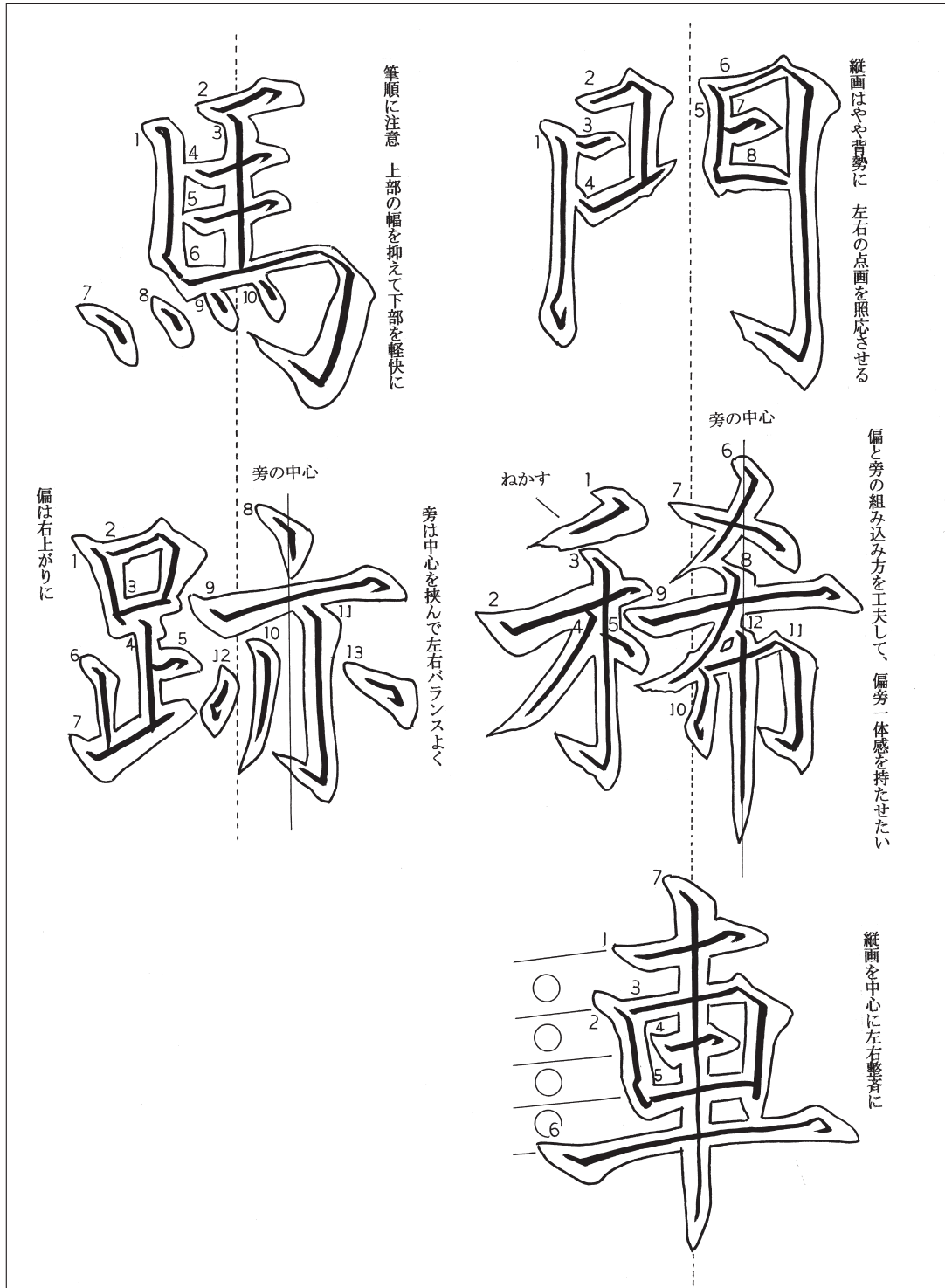


《大意》静間を得意とするという意。(倪祖喜)

読み
門には稀なり車馬の跡
(門前には客は稀で車や馬蹄の跡はない)
(諫晋)

馬跡 門稀車

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載しているように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

馬跡 稀車

馬跡 稀車

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

魚聲 林隠木

馬跡 稀車

林に隠る木魚の声

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	順 位	氏 名
紫陽花に粟あつあて		
朝日かな		

加賀千代女

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

シンシカフク
キヨクナシリョウ

略解

人との約束は必ず実行し覆すことがないよう
自分の器量を人に見透かされないように

大教之興

大教の興るは……



象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西曆六五三年) の臨書 (30)

『大教之興』

雁塔聖教序の線は細線が主体を成して躍動感がありますが、所々に重厚な線を交えているため、軽重と緩急の変化も併せ持っています。また線質の特徴と同時に結体においても、初唐の楷書群の中にあつてとりわけ、動きを持たせる工夫が見られます。

「大」普通概形は三角形になりがちですが、左払い(掠法)が横画の左端から出ておらず、字の右半を広くしています。

「教」偏を大きく暢びやかにして、旁は偏に寄り添う結体です。偏の左払いは横画から行書的に連綿しています。

「之」起筆の打ち込みを強くして太細の変化に富んで筆勢豊かな結体です。

「興」左右対称とはせずに横画は左方を長く、左右点の位置も移動させて絶妙なバランスを保っています。中央の口は一画を減じて左縦画を仮借しています。これを増減仮借法といいます。

逸少 猶少

逸少に(及ばざること)は、猶お逸少が……

■孫過庭・書譜(初唐・西暦六八七年)の臨書(12)

象雲臨



『逸少猶逸少』

今月は変化についての学習には格好の部分を書きます。

唐時代中期の書論家竇臯とうきの著した「述書賦」には、書譜を「凡草にして閭閻りやえんの風。(野暮で田舎臭い)千紙一類、一字萬同……」と酷評を下しています。どこをどのように評して一字萬同という貶辞へんじが出てくるのかは不明ですが、今月の二つの「逸少」は同じではなく、一文としての統一感を保ちながら、結体と用筆を見事に変化させています。

仔細に見てみると最初の「逸少」の「少」は歯切れよい線で直線的で筆勢に優り、後の「少」は逸から連綿で入り、しなやかで柔和な曲線です。ご存知のように書譜は書論の草稿ですので、筆法よりも文意を主眼に書いているものですが、それにも係わらず自然に変化していることは「孫過庭書譜、甚だ右軍の法有り。」と言われる所以です。